

山口県の星の和名～聞き取り調査の記録～

松 尾 厚

**Star Names of Yamaguchi Prefecture**

Atsushi MATSUO

山口県立山口博物館研究報告

第45号(2019年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.45(March 2019)



## 山口県の星の和名 ～聞き取り調査の記録～

松尾 厚<sup>1)</sup>

### Star Names of Yamaguchi Prefecture

Atsushi MATSUO

#### 1 はじめに

山口県立山口博物館（以下山口博物館）には、1983年（昭和58年）から1984年（昭和59年）の間に、当時の天文担当研究員の中島彰によって行われた山口県内の星の和名（星の方言）に関する聞き取り調査の記録が残されている。星の方言は、地域の人々の暮らしと星との関わりを物語っており、全国の漁村、農村を中心に近年まで伝承されてきたが、この20～30年の間に急速に失われている。中島の調査時期は伝承された星の和名を直接聞いていた古老がいる時代であり、今では再調査が困難な貴重な記録である。本稿は中島の許可を得て、その調査結果を山口博物館天文サポーター藤原俊雄氏の協力のもと、著者の責任で取りまとめたものである。

#### 2 中島の調査記録

中島による調査記録は以下の①～③の形態で残されている。本稿は主に①の記録を用いて取りまとめたものであり、①以外の記録を利用している場合は、その出典（[2]または[3]）を記した。ただし、次節〈13〉～〈15〉の調査結果の取りまとめは、ほぼ全て③を用いているため、③を利用している場合は特に[3]との出典は記していない。

① 調査結果を罫紙に手書きで清書したもの（22ページ分）。

聞き取り年月日・場所、聞き取りの相手（話者）の氏名、生年（年齢）等もほぼ完全に記録されているが、話者の言葉なのか中島の気づきを記したものなのか判別しづらい記述が一部含まれる。この①の記録は、次節〈1〉～〈12〉の場所について残されている。（文献[1]）

② 「天文民俗に関係する調査の概要」と題された報告書の写し。

これは中島から北尾浩一氏（星の和名と民俗の研究者、(公財)大阪科学振興協会 中之島科学研究所研究員）へ送られたもので、手書き1ページである。筆者が北尾氏に依頼して入手したものであるが、報告書の形態をとっており、記載内容には信頼がおけると考え、本稿ではこの記述も採用した。（文献[2]）

③ 中島が作成した「山口県の星の方言」のプリント（B4判25枚程度、手書き原稿の謄写印刷）

---

1) 山口県立山口博物館（天文）

これは山口博物館の天体観測会の際に、山口県の星の和名の調査結果を観測会参加者に紹介するために配布したものである。星ごとにその和名や伝承が山口県の白地図に整理記入されており、印刷時期の違いやメモ書きの有無等によって6種類残されている。このプリントには①の内容とともに、既出文献からの引用事項も記されているが、次節〈13〉～〈15〉の場所については①のような清書された記録が残されていないため、この③及び前記②の記載事項を利用した。

本稿で③の記載事項を利用する際は、③に掲げられている参考文献（主に本稿引用文献の[4][5][7]）を参照し、それらの記載事項が既出文献からの引用でないことを、可能な限り確認した。また、残されたプリントには現地で聞き取りながら記したと思われる断片的なメモが、プリントの余白や裏面に走り書きされている。このメモはプリントの記載事項が既出文献からの引用でないことの確認に大いに役だった。（文献[3]）

なお、[1]には「録音テープ有り」と付記された調査記録もあるが、山口博物館では録音テープは発見されていない。

### 3 聞き取り調査の場所と時期

中島の調査場所と調査時期、話者は次のとおりであり、ほぼ全てが北浦と呼ばれる山口県の日本海沿岸の漁港での聞き取りである。ここに記載の市町村名については、いわゆる平成の大合併後の現在の名称を用いており、話者の年齢は当時のものである。冒頭の記録番号は4節で引用している。また、山口県内の各漁協の多くは、合併により現在では山口県漁業協同組合の各支店となっている。

- 〈1〉阿武郡阿武町宇田・宇田郷漁協（現・山口県漁協宇田郷支店）、1984年（昭和59年）3月9日：男性（71歳）
- 〈2〉阿武郡阿武町奈古・奈古漁協（現・同奈古支店）、1984年（昭和59年）3月9日：男性（81歳）、同（65歳）、同（59歳）
- 〈3〉萩市椿東・越ヶ浜漁協（現・同はぎ統括支店）、1984年（昭和59年）1月16日及び3月12日：男性（71歳）（筆者注：前節①の記録には話者は1名しか記載されていないが、[3]には別の男性（同じく71歳）がもう一人記載されている）
- 〈4〉萩市山田・玉江浦漁協（現・同玉江浦支店）、1984年（昭和59年）3月12日：男性（81歳）
- 〈5〉長門市三隅下・野波瀬漁協（現・同野波瀬支店）、1984年（昭和59年）5月14日：男性（85歳）、同（79歳）、同（69歳）
- 〈6〉長門市三隅中・小島漁協（現・同小島支店）、1984年（昭和59年）5月14日：男性（81歳）、同（79歳）、同（76歳）、同（74歳）
- 〈7〉長門市通・通漁協（現・同通支店）、1984年（昭和59年）2月16日：男性（1907年（明治40年）生、77歳）
- 〈8〉長門市仙崎・仙崎漁協（現・同長門統括支店）、1984年（昭和59年）2月16日：男性（1906年（明治39年）生、84歳）、同（生年・年齢の記録無し）
- 〈9〉長門市日置上・黄波戸漁協（現・同黄波戸支店）、調査時期の記載なし：男性（77歳）、同（76歳）、同（74歳）

- 〈10〉長門市油谷津黄・津黄漁協（現・同津黄支店）、1984年（昭和59年）4月20日：男性（82歳）、同（74歳）、同（73歳）
  - 〈11〉長門市油谷川尻・川尻漁協（現・同川尻支店）、1984年（昭和59年）4月20日：男性（77歳）、同（79歳）
  - 〈12〉宇部市琴芝、調査時期の記載なし：男性（1906年（明治39年）生、77歳）
  - 〈13〉萩市江崎・江崎漁協（現・同江崎支店）、調査時期不明：男性（年齢不詳）
  - 〈14〉萩市須佐・須佐漁協（現・同須佐支店）、調査時期不明：男性（年齢不詳）
  - 〈15〉萩市大井・大井浦漁協（現・同大井浦支店）、調査時期不明：男性（年齢不詳）
- 上記15か所の位置を図1に示す。なお、文献[3]によると、この他に久津漁協、大浦漁協（いずれも長門市油谷向津具下）を訪れているようだが、調査記録は残っていない。

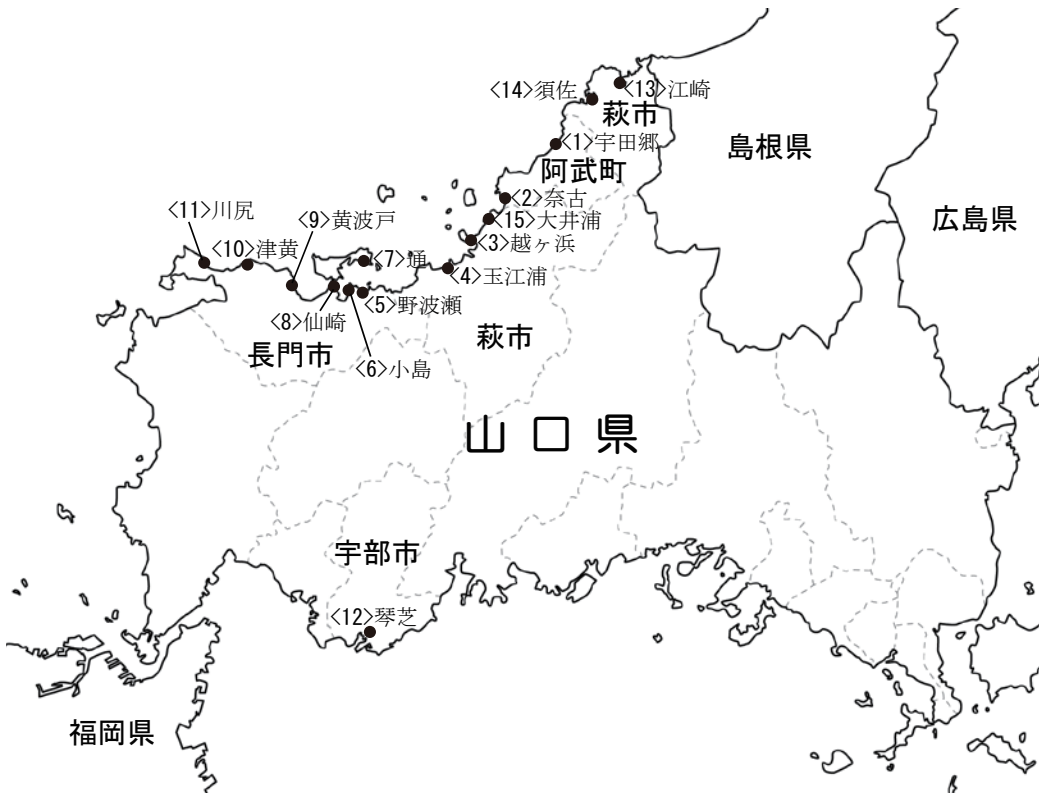


図1 中島の調査地点（15か所）

#### 4 星の和名（方言）の記録

以下に、中島による星の和名の記録を星ごとに整理して記す。中島の記録では和名の表記は、カタカナ、漢字交じりのひらがななどがあるが、本稿では原則としてカタカナ表記とし、漢字表記が明らかな星名については、その後に「」書きで漢字表記（または漢字交じり表記）を記した。ただし長い星名でカタカナ表記では煩わしいものについては、漢字交じりの表記だけ

とした。和名の後の( )内は、同じ項で複数の星の和名を掲載している場合に、どの星についての名前なのかを示している。

地名の前の番号は、前節に示した聞き取り記録の番号である。地名の後の「 」内は、話者から聞き取った伝承等である(一部は中島自身の気づきを含んでいる可能性がある)。\*を付した記述は筆者による注記や用語などの解説である。

現在、一般に使われる星名としては、それぞれの星の固有名(ほとんどが西洋風)のほか、各星座の明るい星にギリシャ文字のアルファベットを当てはめ、〇〇座の $\alpha$ 星、 $\beta$ 星、 $\gamma$ 星、 $\delta$ 星、データ…と呼ぶ方法がある(バイエル命名法)。おおむね $\alpha$ 星が、その星座の中では一番明るく、以下 $\beta$ 星、 $\gamma$ 星…となる。また、星の明るさは、肉眼で見える最も暗い星を6等星とし、5等星、4等星、3等星、…の順に明るくなり、1等星よりもさらに明るい星は、0等星、マイナス-1等星、-2等星、…となる。さらに各等級の中間の明るさの場合は小数を用いる(例えば1等星と2等星の間の明るさであれば、1.5等星など)。ここでは一般によく使われる星の固有名とともに、バイエル名とその星の明るさを記した(星の明るさについては小数点以下を適宜四捨五入している)。

(1) **北極星**(こぐま座の $\alpha$ 星(2等星))

- ① キタノネノホシ「北の子の星」: <10> 津黄。
- ② ネノホシ「子の星」: <1> 宇田郷、<2> 奈古、<3> 越ヶ浜、<4> 玉江浦「航海に非常に大切な星である」、<5> 野波瀬「一年中動かない星である。あまり動かない人をネノホシのような人という」、<6> 小島、<7> 通「一年中動かない」、<8> 仙崎、<9> 黄波戸、<11> 川尻「帆船時代には、この星を頼りに航海している」。
- ③ ネボシ「子星」: <2> 奈古「北にある動かない星。座って動かない人を、ネボシみたいな人と言う」。

(2) **北斗七星**(おおぐま座の一部( $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\delta$ 、 $\varepsilon$ 、 $\zeta$ 、 $\eta$ の各星。イブシロンツエータ イータ $\delta$ 星が3等星のほかは全て2等星))

- ① ナナツボシ「七つ星」: <1> 宇田郷、<3> 越ヶ浜、<5> 野波瀬、<7> 通「(次のヒチセイ、ヒツエノホシも併せて)子の星のまわりを回転する。下になるときは見えなくなる」、<13> 江崎、<14> 須佐。
- ② ヒチセイ「七星」: <2> 奈古、<7> 通。(＊山口県地方では、七を「シチ」でなく、「ヒチ」と発音することが多い。)
- ③ ヒツエノホシ「七曜星」: <7> 通。
- ④ シソウノホシ「四三星」: <11> 川尻「(次のシソウボシも併せて)(話者のうちの一人は)よく言っていた。ヒシャクボシ、ナナツボシとは言わない」、<13> 江崎「(後出⑥の杓子星も併せて)昭和15年頃までは盛んに使っていた。なくてはならない言葉だった。昭和28年頃まで使われた。七つ星は主婦や幼児が主に使っていた」。
- ⑤ シソウボシ「四三星」: <11> 川尻。
- ⑥ シャクシボシ「杓子星」: <13> 江崎。

(3) **すばる**(おうし座のプレアデス星団。すばる(昴)は現代でも全国的に使われる和名)

- ① スバル：〈13〉江崎「(後出③のスマルも併せて)10月、11月頃、昴星が西に傾くと夜が明け漁が終わる」。
- ② シマル、シマルボシ「しまる星」：〈1〉宇田郷「シマル<sup>まってんじょう</sup>真天井 ソバの花ざかり」(\*明け方に)すばるが天頂に来る時期(季節)に蕎麦の種を蒔くと、収穫が良いことを言っているのだろう。秋蕎麦の播種時期である8月下旬～9月上旬には、ちょうど夜明け前にすばるが空高く上がる)、〈2〉奈古「目の良い人ならば、六つか七つ見えて、三角形を長くしたような、ごちゃごちゃとした星」。(シマルはスマルの転訛である。スバル、スマル等の語源や転訛については、[6]にわかりやすく記されている)
- ③ スマル：〈3〉越ヶ浜、〈5〉野波瀬「九つくらいこまかい星が群がっている。7月の初め頃に出る。サバ、アジ、イサキなどがスマルの出のときによく釣れる」、〈6〉小島、〈7〉通「およそ七つほど見える。星がかたまっていて、頭の四つと尾の三つとに分けられる」、〈8〉仙崎、〈9〉黄波戸、〈10〉津黄「10個以上見える。つららのような形をしている。つららをスマルと呼ぶので、こう言われたのではないか。夏から秋口にかけてスマルが昇ってくると、ブリ、ヤズ(ブリの若魚)、ヒラソ(ヒラマサ)などのアオモノがよく釣れる」(\*山口県方言辞典[9]には、「すまる」の項に「①氷垂。ツララ。すまるは<sup>すま</sup>統るで(ママ)。②井戸の中に落ちたものを探り上げる錨」とあり、「しまる」の項には「氷柱(阿武地方)。一般に「すまる」とある)、〈11〉川尻「五つか六つ見える。スマルが昇り始めると魚がよく釣れる」「スマル天井 夜八合、そば一升に小八合」(\*[1]には「小八合」と記しているが[3]では「粉八合」としているので、「小」は「粉」の誤記と思われる。②の俚諺と同様に、明け方に「すばる」が天頂にある頃に蕎麦の種を蒔くと、種蕎麦一升から蕎麦の粉が八合も取れる上作になるとの意。これらの俚諺については[5]に詳しい)、〈13〉江崎、〈14〉須佐。
- ④スマルボシ「すまる星」：〈4〉玉江浦「頭<sup>かしら</sup>が5つで、尻<sup>すそ</sup>が2つの合計7つはよく見える。形はびわの形、ホーキの形をしている」。

#### (4) アルデバラン(おうし座の $\alpha$ 星(1等星))

- ① シマルノアトボシ「シマルの後星」：〈1〉宇田郷、〈2〉奈古。(アトボシとは、ある星の後から昇ってくる星の意。アルデバランは「すばる」が昇った後、1時間程度で昇ってくる)
- ② スマルノアトボシ「スマルの後星」：〈5〉野波瀬「(スマルやカラツキの出の時には魚がよく釣れるが)この星が出る時でも、よく釣れる」(\*カラツキはオリオン座の三つ星のこと、後出(6))、〈7〉通「ちょっと赤い色をした明るい星」、〈9〉黄波戸、〈10〉津黄「三角形をした星の群れの中で一番明るい星」(\*三角形の星の群れとは、おそらくヒアデス星団のことであろう)。
- ③ スマロノアトボシ、またはスマルノアトボシ：〈13〉江崎(\*スマロはスマルの転訛[6])。
- ④ スマルの一番の突き上げ：〈3〉越ヶ浜「スマルが出て30分ほどして上る赤い大きな星」「突き上げは、押し上げるの意味」。(確かにアルデバランは、すばるの真下から、すばるを突き上げるように昇ってくる)
- ⑤ カラツキノマエボシ「カラツキの前星」(アルデバランかベラトリクスのどちらか)：

〈2〉 奈古。（＊ベラトリクスはオリオン座の $\gamma$ 星（後出（7））。マエボシは、ある星の前に昇ってくる星のこと。ベラトリクスは三つ星の30分ほど前に、アルデバランは1時間50分ほど前に昇る）

- ⑥ コボシ：〈4〉 玉江浦「スマルの後に出てくる赤色がかった星[3]」（＊すばるの後に出てくる赤みがかった星と言えばアルデバランを思い浮かべる。しかしコボシが「小星」であるなら（中島の記録には漢字表記がない）、アルデバランは1等星の明るい星なので、「小星」と呼ぶには不自然さを感じる。あるいはアルデバランと比較して「大星」と呼んでいる、別の明るい星があるのだろうか（北尾浩一氏は「大星」として、シリウスの可能性を示唆された））。

(5) カペラ（ぎょしゃ座の $\alpha$ 星（0等星））

- ① シマルノアラテ：〈1〉 宇田郷、〈2〉 奈古「シマルノアラテは高山<sup>こうやま</sup>の方に見え、シマルは宇田<sup>うた</sup>と木与<sup>きよ</sup>との間に見える」（＊高山は北東方向にある標高600mほどの山、宇田と木与は高山の手前の地名）。（＊[5]では「アラテ」に「新手」の字が当てであるが、相手星、相方星の意のようである。カペラは「すばる」とほぼ同じ頃に（精確には25分ほど前に）「すばる」よりも30°北寄りの地点から昇る。なお、[8]～[10]には方言として「アラテ」の記載は無かった）
- ② シマルノアラテ：〈3〉 越ヶ浜「スマルと同時くらいか少し早く上がる。スマルより北の方の明るい星[3]」、〈4〉 玉江浦、〈7〉 通「スマルよりも少し早く上る星」、〈9〉 黄波戸、〈10〉 津黄「よく見える。これが昇りだしたら間もなくスバルが昇る。2間くらいである」、〈11〉 川尻「スマルノアラテがあがるから（＊「あがってるから」の誤記か）、スマルがあがると言っていた」。
- ③ ニキボシ（カペラを含むぎょしゃ座の五角形）：〈13〉 江崎「7～10月の漁期に午前1時頃には見られる。（カペラを含む）五つの星を合わせてニキボシと呼んでいる。この星が出ると天候が安定し、風の変化が少ない」（漢字表記や語義・由来不詳）（＊ぎょしゃ座の五角形とは $\alpha$ 星、 $\beta$ 星（2等星）、 $\theta$ 星<sup>シータ</sup>（3等星）、 $\gamma$ 星（2等星）、 $\iota$ 星<sup>イオタ</sup>（3等星）の五つの星を結んでできる大きな五角形のこと）

(6) オリオン座の三つ星（等間隔に並んでいる $\delta$ 星、 $\varepsilon$ 星、 $\zeta$ 星の3つの星々（いずれも2等星））など

- ① カラツキ（三つ星）：〈1〉 宇田郷、〈2〉 奈古、〈5〉 野波瀬「7月の末頃に東から昇る。（スマルの出のときにサバ、アジ、イサキなどがよく釣れるが）カラツキの出のときにもよく釣れる。カラツキの両側にも明るい星があるが、呼び名はわからない（＊おそらくベテルギウスとリゲル）。スマルより半月ほど遅れて出てくる」、〈8〉 仙崎、〈9〉 黄波戸「カラツキの出に食う、海の光が違う、魚はずむ」（＊カラツキは農具の「唐<sup>から</sup>鋤」の転訛と言われ、カラスキやカラツキは三つ星（小三つ星を含む場合もある）の名前として、広く日本の各地で記録されている[4]～[6]）
- ② カラツキ（三つ星とその下の小三つ星を総称して）：〈7〉 通（中島注：農具の柄鋤<sup>からすき</sup>の呼称が転訛したものであるが、話者は名称の由来は知らなかった）。（＊小三つ星は、三つ星の下方（南側）に縦に3つくらいの塊になって並んで見える星々で、その中の最も明



- るい星でも3等星。有名なオリオン星雲を含む)
- ③ カナツキ「金突き」(三つ星) : <4> 玉江浦「土用の入りの日に一つ見えて夜明けになる」、<10> 津黄「三つ星とは言わない。カナツキと呼ぶ」(中島注:土用の入りの頃にカナツキが昇るといことはご存じなかった)。(＊カナツキはカラスキが転訛して、漁具の「金突き」に重なったと言われる[4][6]。金突きは三つ又(あるいは四つ又)の魚の刺突具である)(＊土用は季節毎に年4回あるが、この場合は夏の土用で「土用の入り」は毎年7月20日前後。この時期に三つ星の一番上の星( $\delta$ 星)は午前4時頃に昇り、ちょうど夜明けの頃である)
- ④ カナシキ(三つ星) : <11> 川尻「(スマルが昇り始めると魚がよく釣れるが)この星が出ると、また魚がよく釣れる」。(中島注:カナシキと「ツ」でなく「シ」で呼ばれている)(＊中島の記録にはカナシキの由来は記されていないが、カナツキの転訛であろう)
- ⑤ ドヨウボシ「土用星」(三つ星) : <11> 川尻「一つ目を「土用」、二つ目を「三郎」、三つ目を「四郎」と呼ぶ。土用の入りの日頃に、この三つ星が昇ってくる」(＊中島の記録では、二つ目、三つ目の星は、それぞれ「二郎」「三郎」ではなく、「三郎」「四郎」である。また、話者が土用、三郎、四郎の三つの星をまとめて「土用星」と呼んだのか、中島が整理のためにまとめて「土用星」としたのかは明瞭でない)。
- ⑥ 三つ星 : <2> 奈古「三つ星は土用の入りから3日たつと皆見える」、<3> 越ヶ浜「土用の入りの日に一番目が上って夜明けになる」「夜明け前に漁をしていて、三つ星の一つ目が上って夜明けになる日が、土用の入りの日である。翌日は二つ目の星が見えて夜明けとなる。翌々日は、三つ目の星が見えて夜明けとなる。また、三つ星の二つ目が上る時、両脇が見える。その頃はイカ、サバがよく釣れる[3]」(＊両脇については後出(7))、<6> 小島。(＊地球の公転運動のために、星々は1日経つと4分ほど早く昇ってくる。「三つ星」の3つの星はほぼ等間隔で並んでおり、この時期は季節の進行に伴い夜明けの時刻が1日におよそ1分ずつ遅れることと相まって、次の日の夜明け前の同じ頃に観察すれば、1番目の星はすでに昇っていて、ちょうど2番目の星が昇る様子が見え、その次の日には3番目の星が昇る様子が見えることになる。素晴らしい観察眼である)
- ⑦ ジョウトウヘイ「上等兵」(三つ星) : <14> 須佐。(＊上等兵の階級章が三つ星であることに由来するのだろう)
- ⑧ カラツケ、ミキボシ(いずれも小三つ星) : <13> 江崎「ミキボシが東から昇る頃漁が一番盛んである」。(漢字表記や語源・由来は不詳)
- (7) ベテルギウス(オリオン座の $\alpha$ 星(0.5等星))、リゲル(同 $\beta$ 星(0等星))、ベラトリクス(同 $\gamma$ 星(1.6等星))
- ① リョウワケ「両脇」(ベテルギウスとリゲル) : <7> 通「カラツキの両脇について出る明るい星。カラツキの真ん中が上がる頃、両脇も上る」(＊カラツキは前出(6)。ベテルギウスとリゲルは、昇る時には三つ星の両側に見える)。
- ② 三つ星のリョウワケ「両脇」、リョウアケ「両明け」(ベテルギウスとリゲル) : <3> 越ヶ浜(中島注:萩では「ワ」を「ア」と発音する習慣があり、両脇が両明けとなったのではないか)。
- ③ カラツケノアトボシ(ベテルギウス) : <13> 江崎「山田星(シリウスのこと、後出

(8) ) の昇る前に赤く輝く星が出る。三つ星の北東にある」(中島注：シリウスをカラツキノアトボシと呼ぶが、異なった星(ベテルギウスとシリウス)を似た名前前で呼んでいる)(\*シリウスの前に昇る赤く輝く星と言えばベテルギウスだろうが、江崎では小三つ星をカラツケと呼んでいる(前出(6)⑧)。しかしベテルギウスは小三つ星よりも15分程度早く昇る。また、カラツケをカラツキなど三つ星を指す言葉の転訛と考えても、ベテルギウスは三つ星のうちの2つの星よりも早く昇る。アトボシと呼ぶには無理がありそうだ。この「カラツケノアトボシ」がベテルギウスを指しているのは間違いのないとしても、その名前自体は何かと混同しているように思える)

- ④ キンボシ「金星」(ベテルギウス)：〈2〉奈古「ベテルギウスは赤味がかっているので」。
- ⑤ ギンボシ「銀星」(リゲル)：〈2〉奈古「リゲルは青白い色をしているので」「昔は灯台も少なく、コンパスがない時には、漁から帰るとき、東南方向から昇るオリオンやシリウスを目当てに帰港していた」。(※中島[3]には「野波瀬漁港では、ふたご座のポルックスとカストルをキンボシ、ギンボシと呼んでいるので、おそらく思い間違いであろう」との記述がある。ポルックス、カストルは後出(9))
- ⑥ カラツキノマエボシ(アルデバランまたはベラトリクス)：〈2〉奈古(前出(4))。
- ⑦ スマルの二番の突き上げ(ベラトリクス)：〈3〉越ヶ浜。(※スマルの一番の突き上げはアルデバラン(前出(4)④)。ベラトリクスはアルデバランが昇った後、1時間20分ほどで、すばるとアルデバランの真下から昇ってくる)
- ⑧ カラツキより少し前に出てくるオオボシ(ベラトリクス)：〈7〉通。

(8) シリウス(おおいぬ座の $\alpha$ 星(-1.5等星))

- ① オオボシ「大星」：〈5〉野波瀬、〈8〉仙崎(中島注：シリウスのことか?)、〈9〉黄波戸、〈13〉江崎、〈14〉須佐。
- ② カラツキノアトボシ「カラツキの後星」：〈2〉奈古、〈5〉野波瀬「スマルからカラツキノアトボシまで、星の出により海が赤く(\*「明るく」か?)なり、魚の移動が激しくなると、餌に食いつくようになる。アジ、サバ、イサキ以外にも全ての魚がよく釣れる傾向にある。満月(大月)のときは、あまり魚が釣れないが、新月の星明かりではよく釣れる。片月おおつきの場合はよい。月の出のときはよい」(\*「片月」については(17)②を参照)、〈7〉通「カラツキ(の後)30分くらいで上ってくる」。(※カラツキについては前出(6)①②)
- ③ カナツキノアトボシ「カナツキの後星」：〈10〉津黄「この星が出てくる頃、漁が盛んである」。(※カナツキは前出(6)③)
- ④ カナシキノアトボシ「カナシキの後星」：〈11〉川尻「大きな星である。この星が昇ってくる頃に、よく魚が釣れる」。(※カナシキは前出(6)④)
- ⑤ ミツボシノツキアゲ「三つ星の突き上げ」：〈3〉越ヶ浜。
- ⑥ タワボシ：〈3〉越ヶ浜。(漢字表記や語義・由来など不詳)
- ⑦ ビラボシ：〈4〉玉江浦「季節に関係していた星で、何か言われていた記憶があるが、はっきりしない」(\*[3]には「ビラは旗や目印の意味だそうだ」とも記載されているが、話者の直接の言葉か中島の注釈か判別できない)。
- ⑧ ヤマダボシ「山田星」：〈13〉江崎「江戸時代、領主に納めない隠し米を作っていた山

田の方角から昇る[2]」「8月～10月、夜明前に（3時50分頃）山の上にある田んぼの上から次第に姿を見せてくる。オオボシは主婦や子供に呼ばれている[3]」。

- ⑨ ウデフリボシ（シリウスとおおいぬ座の $\beta$ 星（2等星）、こいぬ座のプロキオン（ $\alpha$ 星、0.4等星））：〈9〉黄波戸。（\*シリウスからプロキオンまでは、おおいぬ座 $\beta$ 星までと比べて相当離れているので、3つの星をまとめて「腕振り星」と呼ぶには、やや不自然さを感じる）

(9) カストル（ふたご座の $\alpha$ 星（1.6等星））、ポルクス（同 $\beta$ 星（1.1等星））

- ① カレイノメ「<sup>しげ</sup>鯉の目」：〈2〉奈古「旧暦2月の午前2時～3時頃、海に落ちるが、この時期はよく時化する」（\*実際に旧暦2月中旬（現行暦3月中旬～下旬）の2つの星の没は午前3時過ぎ）、〈7〉通「スマルやカラツキが上がる頃に、東（北）の方に見える」。（\*鯉の目のように2つの星が並んで見えることによる）
- ② キンボシ「金星」、ギンボシ「銀星」：〈5〉野波瀬「ほかの星より明るい。一つは金色、もう一つは銀色。真上くらいで輝き、三つ星と同じくらいに昇る」（\*ポルクスは黄色っぽくカストルは白く見え、三つ星が出そろった後30分ほどで昇る）
- ③ フタツボシ「二つ星」：〈3〉越ヶ浜「10月頃になると上ってくる。二つ星が上り始めると、漁をそろそろ終える」（\*10月初めに2つの星が昇るのは午前0時前）。

(10) アークトゥルス（うしかい座の $\alpha$ 星（0等星））

- ① シンカチ：〈5〉野波瀬（\*中島の記録には「シンカチ？」と「？」が付されている）、〈10〉津黄「（②のシンカチボシも併せて）スマル（前出（8））が昇る頃、西に沈む明るい星。明治以前から言われている先祖代々の呼び名」（漢字表記や語義・由来は不詳）。（\*山口県の方言辞典[7]～[10]には、一般名称としてもシンカチの記載は無い）
- ② シンカチボシ：〈10〉津黄。
- ③ アカヅラ「赤面？」：〈7〉通「スマルが梅雨の入りの頃、夜明け前に昇ってくると、真西の方向にアカヅラが水平線から1間くらいの高さがあり、すぐ沈んでしまう。普通の星より明るくて大きい」（\*実際に6月上旬のすばるの出は午前4時頃で、アークトゥルスの没は午前4時半頃）。
- ④ ヨアケノオオボシ（夜明けの大星）：〈9〉黄波戸「晩秋の夜明け頃、東から大きな星が出てくる」（\*11月20日頃のアークトゥルスの出は午前3時40分）。
- ⑤ チャガユボシ「茶粥星」：〈11〉川尻「11月～12月頃、川尻部落では捕鯨をするため、早朝4～5時頃準備をする。体をぬくもらせるために茶がゆを食べる。その頃、東から昇る明るい星。江戸時代から言われていた。捕鯨は元禄時代から明治時代までおこなわれた」。

(11) さそり座

- ① アキンドボシ「商人星」（さそり座のアンタレス、 $\sigma$ 星、<sup>シグマ</sup><sub>とこなみ</sub><sup>タウ</sup>星）：〈12〉宇部市琴芝「大正9年（1920年）以前に、祖母（弘化年間（19世紀中頃）床波生まれ）から「あきんど星」という夏に出る星を教えられた（\*床波は宇部市東部の瀬戸内海沿岸の地名）。農家で使う天秤棒は堅牢で曲がらないが、「ふ」や「綿」を売って歩く商人の天秤棒は弾力性に富んでいる。（話者も）「ふ」や「綿」を売って歩く商人のことを憶えている」（中

鳥注：あきんど星はさそり座のアンタレスとその両側2星を合わせた3星のことであるが、3星の成す形とアンタレスの色から、天秤棒を担いで売り歩き、顔を真っ赤にした商人によく似ている。（\*アンタレスはさそり座の $\alpha$ 星（1等星）で赤っぽい色をしている。 $\sigma$ 星、 $\tau$ 星はいずれも3等星）

- ② けんか星（同定不明）：〈12〉宇部市琴芝「けんか星とよばれている星か星座があり、一つが沈むと一つが出てくる」（\*片方の星座が沈むともう一方の星座が昇ってくるという話で有名なのは、さそり座とオリオン座である。話者の話はこの2つの星座を指しているのかもしれない）。

(12) ベガ（こと座の $\alpha$ 星（0等星）、織姫星）、アルタイル（わし座の $\alpha$ 星（1等星）、彦星）

- ① メンタナバタ、オンタナバタ：〈1〉宇田郷、〈2〉奈古「どちらの星がオンタナバタかメンタナバタかは判らない」、〈3〉越ヶ浜「オンタナバタよりもメンタナバタの方が明るい（\*つまりメンタナバタはベガ）。旧暦7月7日、七夕星は宵に昇って真夜中が天頂、夜明けに西に沈む。天頂の天の川をはさんで北寄りがメンタナバタ、南寄りがオンタナバタである（\*つまりメンタナバタがベガ、オンタナバタがアルタイル）。[3]」、〈7〉通「どちらかがより明るくて、他方は少し明るい」。
- ② タナバタボシ、メンタナボシ、オンタナボシ：〈5〉野波瀬「（タナバタボシは）天の川の両側にある。メンタナボシ、オンタナボシと呼ぶ」。

(13) カノープス（りゅうこつ座の $\alpha$ 星（-0.7等星））

- ① イザリボシ「膝行り星、髻り星」、サツマボシ「薩摩星」：〈2〉奈古「主にイザリボシと呼ぶが、薩摩の方角に見えるのでサツマボシとも呼ぶ」（\*カノープスは南半球ではよく見えるが、山口県の緯度では水平線（地平線）から4度程度しか上がらず、南方向の水平線を這うように（いざるように）西に動いてすぐに沈む。出から沈むまでは4時間程度である。シリウスに次いで全天で2番目に明るい恒星だが、高度が低いと山口県ではそれほど明るく見えない）。
- ② フヨタロー：〈7〉通「初秋の夜明け前、三隅<sup>みすみ</sup>の上に昇る。一間から二間の高さまで上がり、1時間（？）くらいで沈む。フヨタローは星が明るく大きく見える。子供のときから言われており、沖で漁をしていてよく見える。フヨタローは「ものぐさ」「怠け者」の意味で、夜明け前にちょっと姿をあらわして消えることから、そう呼ばれている」（\*三隅は通から見て南方向にある町の名前、現在は合併して長門市）、〈8〉仙崎「ものぐさという意味で、少し赤色をしている」。（\*筆者が萩市の民俗・歴史の専門家に「フヨタロー」という言葉を聞いたことがあるかどうか尋ねたところ、すぐに「フヨタロー（不用太郎）のことだろう。不精者、怠惰な人の意味で使っている。星の名前にも使われているとは知らなかった」との返答を得た）
- ③ フヨタローボシ：〈4〉玉江浦「南の山のきわに、2時間程度出ている星。陸地からでなく玉江港から30分ほど沖に出て見える」。
- ④（伝承のみ）：〈5〉野波瀬：「南の地平線にちょっと出て沈んでしまう。見たことは何度もある。怠け者のことをフヨタローと呼んでいる」（中島注：カノープスの呼び名としてはフヨタローは使われていないようだ）。

## (14) 天の川

- ① 天の川：〈5〉野波瀬「真上に、こまい星がべったりとなっちよるからよくわかる。白い帯のようなものである」（\*「なっちよる」は山口県の方言で、「なっている」の意）。

## (15) 金星

- ① ヨイノミョージョー「宵の明星」（金星）：〈6〉小島、〈13〉江崎。

## (16) 彗星

- ① ホーキボシ「箒星」：〈5〉野波瀬「めったに見ない。星が尾をひく」、〈6〉小島、〈10〉津黄「めったに見ない。もがりのような大きな星」（\*藤原俊雄氏は「もがり」は同音語の古代葬儀儀礼でなく、藻刈り鎌（柄が長大）のことではないかと指摘している）。

## (17) 月に関する呼び方、伝承

- ① オオツキ「大月」：〈5〉野波瀬「満月のこと」。
- ② カタツキ「片月」：〈5〉野波瀬。（\*片月とは旧暦3日（三日月）から10日頃（上弦過ぎ）までの月と、20日（下弦前）から28、29日頃までの月[7]。大月や片月についての伝承は前出（8）②）
- ③ ツキニ チカボシ オオカゼノモト「月に近星 大風のもと」：〈3〉越ヶ浜（中島注：話者の一人は「月のすぐそばに明るい星が近づいても、天候には関係ない」と話していた）、〈13〉江崎、〈15〉大井浦。（\*チカボシとは、月に明るい星が近づいて見えること。正しくは「月が明るい星に近づいて見える」というべきだが）
- ④ ツキニ チカボシ アメガフル「月に近星 雨が降る」：〈14〉須佐。

## 5 調査結果の検討と考察

筆者自身は民俗学や方言に疎く、中島の調査結果について十分な検討を加えることはできないが、中島が聞き取った和名のうち、特徴的なものを整理すると次のようになろう。各和名の聞き取り地点の後の番号は、該当する記録（4節）の項番号である。

## (1) 他ではほとんど記録されていない和名

- ① コボシ（アルデバラン：〈4〉玉江浦（4）⑥）
- ② ニキボシ（カペラを含む「ぎょしゃ座の五角形」：〈13〉江崎（5）③）
- ③ ミキボシ（小三つ星：〈13〉江崎（6）⑧）
- ④ タワボシ（シリウス：〈3〉越ヶ浜（8）⑥）
- ⑤ ピラボシ（シリウス：〈4〉玉江浦（8）⑦）
- ⑥ シンカチ、シンカチボシ（アークトゥルス：〈5〉野波瀬（？）（10）①、〈10〉津黄（10）①②）

以上の6つの星名は、日本の星の和名についての集大成と言える[4]～[6]にも記載が無いが、語義や由来など、はっきりしない点が多く惜まれる。

**(2) 山口県特有の伝承、方言を背景にした和名**

- ① 茶粥星（アークトゥルス：〈11〉川尻（10）⑤）
- ② 山田星（シリウス：〈13〉江崎（8）⑧）
- ③ フヨタロー、フヨタローボシ（カノープス：〈7〉通・〈8〉仙崎（13）②、〈4〉玉江浦（13）③）

これらの和名は他地方では記録が無いだけでなく、山口県特有の伝承や方言を背景としていて興味深い。山口県の民俗・文化と関連した貴重な山口県固有の和名と言ってよいだろう。なお、③のフヨタローについては、中島の調査以前にも長門市通地区での記録として[7]に記載されているが、[4][5]には記録がない。

**(3) 他所にもほぼ同義の和名はあるが、中島が記録した名前はあまり見かけないもの**

- ① ヒツエノホシ「七曜の星」、北斗七星：〈7〉通（2）③）

北斗七星が7つの星から成ることに由来するが、これを「ヒツエノホシ」と呼んでいる例は[4]～[6]に見当たらない。七曜の星を「シチヨウの星」「ナナヨの星」などと呼ぶ例は、東日本を中心に各地で見られる[4]～[6]。「ヒツエノホシ」は中島の調査以前の[7]にも「ヒツエノホシ（通地区）七曜星。ナナツボシとも言う」として記載されている。山口県では「シチ」を「ヒチ」と発音することが多いので、「シチヨウ」が転訛したものだろうか。なお、[8]～[10]には「ヒツエ」の記載は無かった。

- ② スマルの一番の突き上げ（アルデバラン：〈3〉越ヶ浜（4）④）
- ③ スマルの二番の突き上げ（ベラトリクス：〈3〉越ヶ浜（7）⑦）
- ④ 三つ星の突き上げ（シリウス：〈3〉越ヶ浜（8）⑤）

②～④のいずれについても「アトボシ（後星）」と呼ぶ例は各地に見受けるが[4]～[6]、「突き上げ」として記録されているのは山口県の越ヶ浜だけである（本稿および[5]）。さらに突き上げが二番までであるのは面白い（「二番の後星」などの星名は記録されていないようである）。「突き上げ」との表現は、単に「後星」よりもずっと鮮烈に情景を思い浮かべることができる。

- ⑤ 土用、三郎、四郎（オリオン座の三つ星：〈11〉川尻（6）⑤）

オリオン座の三つ星が土用の入りの頃、明け方に1日経つごとに一つずつ昇ってくるとの伝承は日本各地で記録されているが、4節（6）⑤⑥の記録のように山口県でも精確に観察し伝えていた。[5]のおうし座の項には「すまるのあらて」の伝承とあわせて、山口県（萩市越ヶ浜）での同様の伝承が記録されている。しかし「土用」が星名として記録されている例は比較的少ないようで、三重県での「土用三郎」[5]、大阪府での「土用星」[6]を見かけるにすぎない。それにしても観察の鋭さには驚かされる。

- ⑥ 金星、銀星（ベテルギウスとリゲル：〈2〉奈古（7）④⑤）

中島は「ふたご座のポルクス（金星）とカストル（銀星）との思い間違いでないか」と記しているが、オリオン座は三つ星を持つなど特徴のある星座である（ベテルギウスとリゲルの間に三つ星が見える）。また、オリオン座とふたご座は見える位置が相当違い、金星と銀星の間の距離も2つの星座ではかなり違う。間違えることがあるのだろうかとも思う。ベテルギウスとリゲルについては、それぞれの星の色に由来する「源氏星」「平家星」（平氏・源氏の旗印の紅白にちなむが、実際の星の色とは逆に名付けている）や、三

つ星の両脇に見えることから「金脇」「銀脇」の和名は記録されているが[5][6]、「金星」「銀星」の記録は[4]～[7]に無いようである。

⑦ カレイの目（カストルとポルクス：〈2〉奈古（9）①）

ほぼ同じ明るさの星が2つ並んでいることから、日本各地でガミノメ（蟹の目）、ネコノメ（猫の目）、カタヤサン（\*エイの一種という）など、さまざまな動物の目に例えられている。長崎県壱岐ではカレンメ（蝶の目）も記録されている。[4]～[6]。

⑧ アカヅラ（アークトゥルス：〈7〉通（10）③）

中島の記録では「赤面？」となっているが、「赤面」が正しければ星の色に由来するのだろう。筆者は黄色の星との印象だったが、赤味がかった星との記録は多い。岐阜県ではグヒンボシ（狗賓星）として記録されている。狗賓とは赤っ面の天狗の一種という[5][6]。

⑨ 夜明けの大星（アークトゥルス：〈9〉黄波戸（10）④）

アークトゥルスは山口県から見える星としては、シリウスに次いで明るい星である（低空のために暗く見えるカノープスを除く）。筆者も空を見上げた時に、この星の明るさに驚くことがある。この星名は[4]～[7]に記載がないが、良い名前である。

⑩ イザリボシ（カノープス：〈2〉奈古（13）①）

カノープスの特徴である「ちょっと出て、這うように水平線や山の端を進んで、すぐに沈む。ほとんど出てこない」の意を持つ星名として、兵庫県で「ドウラクボシ（道楽星）」、岡山県で「オーチャクボシ（横着星）」、徳島県で「ニジリボシ」、香川県小豆島で「ブショウボシ（無精星）」など、多種類が記録されている[5][6]。イザリボシやフヨタローの星名もこの星の同じ特徴を表現しているが、イザリボシの記録は[4][5][7]には見当たらない。

⑪ 薩摩星（カノープス：〈2〉奈古（13）①）

カノープスは必ず南の方向に見えるので、その地域から見て南方の地名を星名とした例は多い。大阪の「紀州星」、岡山県の「讃岐星」、広島県の「伊予星」などである[4]～[6]。「薩摩星」は佐賀県や長崎県壱岐でも記録されている[4][6]。

中島の記録を見ても、山口県内で使われていた星の和名には、他の多くの地域で使われているものがたくさんある。別の地域で発祥し、それが広まり伝わって来たものが多いのだろう。しかし、それらの名前がこの地域に受け入れられ、記録されたということは、その星について、この地域の人々も同じような見方をしていたからと考えられる。

今の我々は現在使われている西洋流の星座を学び、かなり無理のある星の並びも一つの星座として扱っている。星の色についても、スペクトル型から「このような色に見えるはず」との思いが先に立つ。しかし記録された和名を見ると、「この2つの星を目立つと感じているのか」「この星とあの星を対比して見ているのか」「あの星はこのような色として表現しているのか」「明るい星はやはり大きいと見えるのか」など、予備知識や先入観のない人間の自然のとらえ方を感じる。筆者自身は天体観望会など天文の教育普及活動に従事しているが、このような活動においても、一方では既成知識にとらわれない素直な見方での提示が重要だと感じた。

## 6 おわりに

筆者が山口博物館に着任した30数年前に、前々任者である中島の調査記録を見つけ、それを保管するとともに、いつかまとめて公にすべきものと思い、筆者自身も少しずつ星の和名や伝承について学んできた。その間に中島氏から取りまとめと公表の許可を得たものの、作業は遅々として進まず現在に至った。この間、「公表されなければ貴重な調査記録を利用し難い」との叱咤激励もいただき、このたび藤原俊雄氏の多大な協力を得て、なんとか取りまとめることができた。

取りまとめにあたっては中島が残した記録を出来るだけ正確に記すこととしたが、清書された[1]については話者の発言か中島の注釈かの判別が困難な場合がある。また、[3]には現地での聞き取り時のメモと思われる貴重な記録があるが、余白や裏面に走り書きされているため、文意を繋げるのも容易ではない。このため筆者の誤解により、誤ってまとめた部分もあり得るが、その点をご寛恕いただきたい。本稿に誤りがあったとしても、その責は中島ではなく筆者にあることを承知されたい。

おわりに、本稿の取りまとめに力を尽くしていただいた藤原俊雄氏、素稿に目を通され助言をくださった北尾浩一氏に心からお礼を申し上げます。

## 引用文献

- [1]中島彰、1984年1月～5月の調査結果を手書き清書した記録、山口博物館保管
- [2]中島彰、1993、「天文民俗に関係する調査の概要」（中島から北尾浩一への報告書）、報告様式への手書き記入（A4判1枚）、山口博物館保管（写し）
- [3]中島彰、1983年秋頃～1984年5月、「山口県の星の方言」（山口博物館天体観測会での配付資料）、手書き謄写印刷及びそれに記入された手書きのメモ（現地で聞き取り中の走り書きと思われるものを含む、計6種）、山口博物館保管
- [4]内田武志、1973、星の方言と民俗（民俗民芸双書80）、岩崎美術社
- [5]野尻抱影、1973、日本星名辞典、東京堂出版
- [6]北尾浩一、2018、日本の星名事典、原書房
- [7]岡野信子、1979、くらしのことは（長門市史編集委員会編、長門市史民俗編、731-932）、長門市
- [8]山口県文化史編纂委員会、1952、防長方言考・防長民謡集、山口県知事公室文化広報課長
- [9]山中六彦、1967、山口県方言辞典、山口県地方史学会
- [10]須佐地方の方言編集委員会、1977、須佐地方の方言、須佐町教育委員会